

(3) 行政機能マヒ状態に

昭和十九年初頭迄は宮古島は未だ直接戦火にさらされることなく、人心も比較的平穏だった。然し五月に入って陸海軍の大部隊が乗り込み、飛行場工事が急速に始まり、更に八月島外疎開が推進されるに及んでようやく事態の容易ならざるに気付き、民心は騒然、戦場化必至の緊迫した空気が横溢し始めた。十九年初頭から二十年にかけての一般状況は次のようなものであった。

(一) 行政

宮古郡の行政区画は平良町、城辺、下地、伊良部、多良間村の一町四村、これを監督する機関としての沖繩県宮古支庁（大正末迄は島庁）が置かれ、支庁長が地方行政の最高責任者であった。町村の行政は町会若しくは村会で選任された首長が当り、町内会、隣組などの組織を通じて戦時体制の強化ははかられていた。

当時の支庁長は十九年四月大外久雄氏の八重山支庁長転出の後、幸けて任命された納見兼吉氏（前中頭地方事務所長）で、ベテランの地方行政官として評判が良かったが、戦時行政の総元締としての陣頭指揮的積極性に乏しく、果敢実行力に欠けると云うので、納見兼吉氏は着任後直ちにその更迭を考えたことがあったようだ。一説によれば納見兼吉氏は同郷で台湾在任時代親交のある明延佳氏（宜蘭市長、のち高雄市の重要物資管理長）の起用を考え、非公式に意向を打診したと云う。明延氏は受諾する肚だったが、戦況の急速悪化についに実現をみなかったと云う。納見氏は終戦後米軍政官からあらためて支庁長のポストを保證されていたが、二十年十二月精神に変調を来し、変死した。宮古支庁の機構は総務（久場川清氏）、学務（当路由憲氏、十九年十二月以降垣花恵昌氏）、経済（野口幸氏）、十九年以降東風平恵令氏）の三課が置かれ、戦時下の地方行政を担当したが、十九年末頃からは軍側の指示、要求を実行することが主なる役目となり、行政機関とし

ての性格、使命は殆んど失われた。二十年春庁舎が空襲で焼失して以来は添運などに分散、行政機能は事実上マヒ状態に陥った。各町村には町村役場が置かれ、自治体行政にあたった。十九年秋多良間村を除く全町村長が疎開地の状況視察の名目で台湾へ渡り、石原平良町長（二十年二月決死的に殉任）を除いて台湾に残り、又助役収入役などの三役のうちでも島外に脱出する者もあり、平良町の場合二十年二月の町会で砂川忠一氏が助役に選出される迄は収入役の下地恵位氏が町長代理を勤めると云う有様だった。当時の町村長は農業会長を兼ねていたので、食糧の増産割当、供出、耕地の軍民利用についての協定などその職責は大きく、従って多くの首長の不在は地方行政の遂行に影からず支障を来した。

(4) 軍に楯ついた警察署長

宮古警察署は治安維持に任ずる一方憲兵隊と協力して反軍思想、造言、非語、スパイ行為、言論集会、反戦思想など戦時刑法犯の取り締り、民防、消防活動の指導などその職務は広範多岐に及び、二十数名の警員だけでは手が回らない程だった。当時の署長新城長保警部（昭和十八年五月糸満署長より着任）は律儀さと頑固さで知られ、軍側の高飛車な態度に反感、積極的協力の姿勢を示さなかった。このため軍側の不興を買ひ、集団の某参謀から「非国民」と怒鳴られたこともあったと云う。宮古署の構内には物見台とサイレンが設けられ、空襲の場合は最早早報し各警防団を通じて防空避難指導、時限爆弾などの警戒措置、軍民間のトラフル調整など本業の警察行政以外の仕事が多かった。二十年一月新城署長は名護署長に転出して宮古島を去り、後任には二月二十日付で嘉手納署長島袋忠補警部が発令され、三月一日入港の輸送船で着任した。島袋署長の回想によればこの輸送船（大建丸）は島袋氏が上陸後間もなく米機が空襲で撃沈されたところまで、全く生命がけの赴任だった。島袋署長が着任した頃は集団司令部は野原岳に移り、各行政機関は郊外

又は添運などの比較的安地帯に移転、その後空襲が激しくなったので宮古署の一部は添運に移り、辛うじてその機能を維持した。四月宮古、八重山、嘉手納署長は警視に昇任したが、通信社絶て通知に接せず、戦後始めて分ったと云う。島袋氏は戦後の二十年十二月米軍政官から支庁長に任命された。

その外の主なる行政、司法官庁、公共機関の状況は次のようなもので、その多くは職員が防衛召集、奉給不渡りなどで通常の業務遂行は不可能に近く、食糧の調達、空襲からの避難に追い回され、行政はストップ状態と云ってよかった。

(イ) 平良区裁判所

昭和十九年十一月事務停止（登記事務を除く）となり、令長高雄判事は十一月那覇地裁に転任

(ロ) 宮古郵便局

庁舎が被災から免かれたため、辛うじて一部の業務（主として電話）を維持、局長は佐々木栄十郎氏

(ハ) 宮古税務署

田代速郎署長の竹田署長転出後は後任発令されず、間税課長宮里良栄氏が署長代理、二十年初頭迄業務継続、泡盛、砂糖の配給割当権を握っていたので、軍から難題を持ち込まれることが多かったと云う。

(ニ) 国民動労員署

十八年末迄は本土軍需工場に送り出す徴用工の動員事務、平和産業から軍需産業への転換に伴う人員の配置転換などが主な業務だったが十九年後半期からは地元飛行場作業など軍関係作業への動員事務が主体に変わった。署長は新垣徳吉氏。前任の勝達盛良氏は中頭事務所長へ転じ殉職

(ホ) 南勝園

空襲で園舎の一部被害があったが、業務は継続。園長は地方衛生技師

(ヘ) 多田景養氏

多田景養氏

(ニ) 洞候所、無線送受信所

洞候所、無線送受信所

の性格、使命は殆んど失われた。二十年春庁舎が空襲で焼失して以来は添運などに分散、行政機能は事実上マヒ状態に陥った。各町村には町村役場が置かれ、自治体行政にあたった。十九年秋多良間村を除く全町村長が疎開地の状況視察の名目で台湾へ渡り、石原平良町長（二十年二月決死的に殉任）を除いて台湾に残り、又助役収入役などの三役のうちでも島外に脱出する者もあり、平良町の場合二十年二月の町会で砂川忠一氏が助役に選出される迄は収入役の下地恵位氏が町長代理を勤めると云う有様だった。当時の町村長は農業会長を兼ねていたので、食糧の増産割当、供出、耕地の軍民利用についての協定などその職責は大きく、従って多くの首長の不在は地方行政の遂行に影からず支障を来した。

(4) 軍に楯ついた警察署長

宮古警察署は治安維持に任ずる一方憲兵隊と協力して反軍思想、造言、非語、スパイ行為、言論集会、反戦思想など戦時刑法犯の取り締り、民防、消防活動の指導などその職務は広範多岐に及び、二十数名の警員だけでは手が回らない程だった。当時の署長新城長保警部（昭和十八年五月糸満署長より着任）は律儀さと頑固さで知られ、軍側の高飛車な態度に反感、積極的協力の姿勢を示さなかった。このため軍側の不興を買ひ、集団の某参謀から「非国民」と怒鳴られたこともあったと云う。宮古署の構内には物見台とサイレンが設けられ、空襲の場合は最早早報し各警防団を通じて防空避難指導、時限爆弾などの警戒措置、軍民間のトラフル調整など本業の警察行政以外の仕事が多かった。二十年一月新城署長は名護署長に転出して宮古島を去り、後任には二月二十日付で嘉手納署長島袋忠補警部が発令され、三月一日入港の輸送船で着任した。島袋署長の回想によればこの輸送船（大建丸）は島袋氏が上陸後間もなく米機が空襲で撃沈されたところまで、全く生命がけの赴任だった。島袋署長が着任した頃は集団司令部は野原岳に移り、各行政機関は郊外

空襲で一部の局舎は破壊されたが、場所が郊外に置かれていたので、業務は辛うじて続けられていたようだが、軍の管理下に移った。

(ト) 専売局出張所

煙草、塩の配給割当が主要業務だが、ストップ払底によって業務は自然停止、所長島村俊男氏

(チ) その他の諸官庁も右とは同じようなものだったと考えられる。

(5) 女学生は特志看護婦へ 生徒児童も決戦動員

(一) 教育

十九年夏県立女学校と平一国民学校は師団司令部、県立中学校は海軍整備隊、平二校は特設水上勤務隊などの兵舎にそれぞれ接収されたのを始め、各青年学校、国民学校々々が殆ど部隊兵舎に充てられたため、生徒児童の教育は分教場や民間の空建物などを利用して細々とつづけられたが、飛行場など軍施設工事や防空壕造りに動員されることも多く、二十年始め以降は空襲が激しくなったので、授業は全面的にストップ状態となった。

中学生の一部は平良町郊外のソノリ嶺にバラック教室を造り、授業を続けたが、高学年生は通信隊に入隊して作戦準備に協力、又女学校高学年生は特志看護婦として従軍、鏡原に設けられた陸軍病院勤務を命ぜられ、傷病兵の手当にあたった。(一部は軍属員として司令部や部隊本部などの業務補助)

(註) 厚生省の復員名簿には筆生四、看護婦三、給仕四十二名の女子が軍属として記録されている。なお二十年一月発行の沖繩新聞は決戦下における宮古女子高生の敢闘姿を同校教頭（砂川安隆氏？）談として次の如く報じている。

もう型にはまった古い教室内で勉強はすっかり変わり、いまでは三、四年生の上級生は歩しても奉仕作業へ乗り出した。既に特志看護婦と

なった生徒もあり、種々奉仕作業に乗り出し、兵隊さんの感謝を集めている。

(6) 家畜増産へ曉動員

十九年十一月二十日付の沖繩新報は宮古における畜産増強運動について次の如く宮古支庁よりの報告を紹介している。
宮古郡では特に戦時下家畜資源の確保と将来の食糧対策のため、十一月六日午前零時現在を期して支庁、農業会、役場、翼社団を一齐に曉動員して各戸別の畜産現有調査を行なったが、このため家畜の乱買密殺も防止されている。

(7) 食糧、辛じて最低維持

戦前の宮古郡民の常用主食は甘藷が主で、米を常食しているのは一部だった。米は台湾から移入、昭和十五年配給制施行以来、食糧営団支所の手で配給業務が行なわれていた。十九年半ばからは台湾との海上交通が杜絶え勝ちになり、食糧の配給制限は一段と強化された。
十九年十二月の記録によると、当時の配給量は非農家一人当り二六〇グラム（合八勺）農家一人当り四〇グラム（三勺）何れも日量Ⅱとなっているが、三月以降は配給業務は殆んど停止され、食糧営団保有米は野戦貨物庫支廠の管理下に移されたようである。
この外主食の不足を補うため、時たま町内会隣組を通じて甘藷、鮮魚類、営団支所扱いのメリケン粉、大豆、めん類の配給が若干なされていたが、疎開や動員で人口がかなり減っていたので、二十年初頭迄は民の食生活は辛うじて維持されていたようである。
十九年十二月には家庭用大豆が非農家一人当り五合、農家一戸当り一升つづ配給されたことが記録されている。
この外繊維、雑貨などの日常生活物資も嚴重なる統制下に置かれ、切符制で配給されていたが、二十年始めからは配給は完全に杜絶し、郡民

の日常生活は極めて不自由になっていた。

(8) 商業活動はストップ

宮古の経済活動は砂糖、上布、鹽の三大生産業によって維持され、それに海外出稼ぎ（漁村関係）による送金などもプラスして商業取引も活発であったが、十九年夏以降、海上交通の杜絶と物資の払込、寄留商人の引き揚げなどによって商店街、飲食店街などは殆んど閉店休業状態となり、商業活動は事実上閉止した。
金融機関としては第四十七銀行宮古代理店、南和無尽出張所、興業銀行代理店などがあつたが、興業銀行代理店は閉店、南和無尽是宮古島憲兵分隊に取られて民家に移転して細々乍ら事業を継続、第四十七銀行代理店は手持ち資金の一部を宮古官吏の奉給支払いに融資、終戦時の八月十五日現在百八十万円の現金を保有、金融機関としての機能を維持してきた。

糖業は分蜜、含蜜糖の二本立てで、分蜜糖は沖繩宮古工場で一手に生産されて最盛期には十万吨を生産したこともあつた。糖業は二十年始め迄つづけられ、かなりのストックがあり、軍民の甘味資源をまかなうに役立った。黒糖は一部が共同製糖で、大部分は旧式の鉄車による製法で、大部分が甘味用に、一部が地酒の原料に使用された。
上布は組合事務所が部隊に接収され、原料不足で生産が低下、又鹽漁業は乗組員の不足、漁船の徴用、燃料不足、空襲による被害率の増大などで操業は著しく低下した。この外農業生産品の集荷配給を主要業務とする興業業会支部（支部長青木雅英氏）は庁令を船舶輸送隊に接収され民家に移転するなど目星しい公共建物も軍関係によって占められ、公共機関は事実上、業務停止を余儀なくされた。

(9) 海上交通・輸送船に依存

昭和十八年頃迄は宮古、那覇、石垣、キールンを結ぶ海上交通は大坂

商船所属の貨客船湖南、湖北丸（二千六百トンクラス）が定期的に就航しこの外小型機帆船が若干就航していたので、左程不自由ではなかつたが乗船客は公用（応召、徴用）者が優先されたため、一般郡民の乗付極めて困難になっていた。十八年末からは大型船は慶運丸（一、九二二トン）一隻となり、海上の往来は益々不便になった。十九年六月同船は沖繩航路から別の航路に回され、爾後は輸送船、機帆船に依存するようになった。当時宮古丸（宮古商會所有）と云う五十トン足らずの小型発動機船が沖繩航路で活動、一般から重宝がられた。

(10) 非戦士員の犠牲も多数

宮古地区における一般非戦士員の犠牲者（空襲、海上遭難）数については明確な資料がないので、明かでないが、風土病などによる間接的な犠牲者を加えると、二百名を上回るものと推定されている。
犠牲者の大半は機銃弾、爆弾、ロケット弾などによるものだが、なかには防空壕に避難中、直撃弾を受け一家全滅した悲惨な例もある。
軍需で陣地構築用の坑木伐採作業のため、西表に向う途中、海上で遭難死亡した下地村の伐採隊員もその一例、戦死者のうちには
(一) 宮古神社宮司本水玄位（二十年五月十一日平良町東件二〇〇の畑で農作業中、爆片（機銃弾）を頭部に受けて即死）
(二) 大阪商船宮古代理店主瀬河朝善（二十年四月三日平良町西里一六二映画館新世界の軒下で機銃弾を腹部に受けて死）
(三) 軍需中尉身儲重豊、同夫人信子（二十年五月頃自宅前庭の防空壕で直撃弾を受け死）
の諸氏が居る。

(11) 宮古島スパイ事件

昭和二十年六月（一説では七月）沖繩戦が終末に近づきつつある頃平良町下崎部落の民家に身元の怪しい男が潜入しているとの情報が宮古軍特高係に入り、通報を受けた憲兵隊が現場に急行してこの男を逮捕、忠

兵隊に連行して取り調べた結果

一、沖繩北部の収容所で米軍からスパイ行為を強制され、他の数名の仲間と共に潜水艦で宮古近海迄運ばれ、一人だけ降されゴムボートで待俟海岸に送りつけた。上陸後しばらく野山に潜伏していたが、飢えと疲労に耐え兼ね、下崎部落に入り、民家に泊めて貰った。

一、宮古島に潜入した目的は日本軍の兵力概要、高級指揮官の氏名、司令部の位置などを探り出し、報告することにあつた。
一、使命を達したあとは海岸で信号弾で合図次勢潜水艦を迎えに来るなどが明らかになった。同人は沖繩生れの新崎コウ一と名乗ったが、身元ははっきりしなかつたようである。同人の身柄は憲兵隊で暫く拘留してあつたようだが、スパイ容疑は動かせないとして銃殺刑に処せられたと云う。
(註) 本件については当時の宮古島憲兵分隊山浦准尉に照会したが、回答に接しなかつた。

付記

宮古島防禦戦法及び陣地用法

宮古島の防禦配備は地形上、敵が上陸地点として選ぶ公算が大きい南及び北地区に重点が置かれたことは前述の通りだが、左記を付記して補足する。

- (一) 先島集團長は第二十八師団主力到着直後の応急配備として宮古島を次の四地区に分けて担任部隊を配置したが、防禦の重点とされる北地区(平良町)南(下地村)西地区には虎の子の歩兵第三、第三十連隊(歩兵第二十六連隊は師団の離下を離れて大東島に派遣)を配した。
- 北地区(平良町)歩兵第三十連隊
- 南地区(下地村)歩兵第三連隊
- 東地区(城辺町)騎兵第二十八連隊
- 海軍地区(平良町の一部)海軍警備隊

(二) 九月末頃増加兵団の二コ混成旅団が到着したので、次の通り兵力を配置替えした。

北地区を二つに分け、あらたに中地区(平良市佐川根一帯)を設定して騎兵第二十八聯隊を配す。

東地区の担任に独立混成第六十旅団をあて第五十九旅団の一コ大隊を指揮下に入れる。

増加された五十九旅団(一コ大隊欠)は伊良部島の守備を担任しめ

(三) 二十年六月始め状況が逼迫したので、宮古本島の防衛力を強めるため、伊良部支隊の主力(一コ大隊は伊良部島に残置)を北地区に移動、さきに第六十旅団長の指揮下に入っていた一コ大隊を復せしめた。これ以北地区の守備兵力は混成旅団一コ(一コ大隊欠)に歩兵第三十聯隊、その他の配属部隊を加え最強力となった。この措置は兵力の重点集中をはかる納見集団長の持論が実行されたもので、最悪の場合、伊良部島を放棄しても宮古本島だけは死守すると云う気構えの現われでもあった。

宮古島所在兵力は最終的には一コ師二コ混成旅団を基幹とするおよそ三万名(海軍部隊を含む)だが、師団の主戦力は歩兵聯隊二コ(一コ聯隊欠)だけで、又混成旅団は編成人員三千数百名、歩兵聯隊に毛の生えた程度、従って陸戦の主体となる歩兵大隊は伊良部支隊を合わせて十四コ大隊、およそ一万二千人、これに歩兵部隊に改編された騎兵聯隊(およそ七百)各種の火砲部隊などを加えて純然たる戦斗兵力は二万名内外に止まり、のこりは兵站、衛生、給食、基地関係の後方部隊に過ぎず、勿論地上戦斗開始後は第一線に投入されることになるが、訓練、装備貧弱を免かれず、戦力としては大きな期待は持てなかったのではないかと考えられる。

水際決戦と戦術持久

集団では海軍と協力して敵上陸予想海面一帯に機雷及び水中障害物を

設けると共に断崖や海岸の起伏を利用して堅固な水際陣地を造り、連射砲、迫撃砲、機関砲などの重火器を配備、敵上陸の場合、沿岸砲台や内陸からの支援火力の協力を得て一気に水際を撃滅する方針を樹ていたが、敵が上陸に成功して橋頭堡を築いた場合は戦車隊を先頭に果敢な夜襲を敢行して追い落すべく、あくまで上陸阻止を第一の重点目標にしていたが、これに失敗した場合は野原岳一帯の複層陣地を軸に大小の丘陵起伏を利用して構築した堅固な前線及び主陣地に拠つて出血戦を強要、最後迄敵の飛行場使用を妨害して国軍全体の作戦に寄与する考えであった。

次に洞窟陣地編成の指導要領としてはサイパン、硫黄島、沖繩戦などの戦訓を採り入れ、(一) 各々の洞窟陣地の孤立化をさけるため、各洞窟間を相互の斜射、側射、背射などによって支援し合う(二) つとめて多くの出口を設けて射撃設備を施し、水平、垂直各方向の死角を極小にする(三) 近くに野戦陣地をあらかじめ構築し置き敵の戦車や歩兵が肉迫して支援射撃が困難になった場合、野戦陣地から飛び出し応戦する(四) 敵の馬乗り攻撃をさけるため警戒監視を厳重にする、などを徹底させた。又戦車防禦のため、歩兵による挺身爆雷攻撃戦法を採用、陣地周辺にタコ壺と称する個人壕を無数に掘り、十キロ入りの爆薬箱を持った肉攻班を待機させ、敵戦車の下腹で爆発させ、キャタピラを破壊して攔控せしめる方式で、猛訓練を施すなど対戦車戦法に力を入れたが、沖繩の戦訓によると、初期の頃はかなり効果を収めたが、敵の歩戦協同戦法が巧妙になるに伴って効果は減殺されてきたと云う。

敵機の夜間哨戒強化

飛行場の補修作業は空襲をさけて主に夜間行なわれたが、五月頃()より沖縄基地から敵夜間哨戒機が飛来、照明弾を投下して妨害するようになったので、夜間の補修作業及び特攻機の発着にも少からず支障を来すようになった。

宮古島関係将校職員表

(昭和二十年八月十五日現在)

第二十八師司令部

經理部	兵器部	管理部	高級副官	參謀	參謀長	師團長
主大尉	主中尉	部長(兼)	中佐	中佐	大佐	中將
森当	小西	吉田	清野	杉本	陸路	納見
麻西	田武	朝倉	村野	和	富士	敏
四靖	安	周	良秀	朗	雄	壽
郎彦	平	治	久			
	特一五	三九期	特一	三九	四二	三七
	二六期	少三五				二七期

司令部付	獸医部	軍医部
主大尉	獸部大尉	医部大尉
飯塚	山田	富田
中塚	打田	鳥集
村島	田田	上崎
西野	尾村	紀村
外野	对馬	敏修
小坂	井	一
北林	森	友
山田	正	英
玉木	義	輔
入田	福	男
大竹	淺	
宮田	之	
三留	千	
山田	早	
打田	豐	
脇田	直	
脇田	豐	
富田	夫	
鳥集	教	
上崎	三	
尾村	光	
紀村	一	
对馬	一	
井	一	
森	友	
正	英	
義	輔	
福	男	
淺		
之		
輔		
男		
	特二	

第六中隊 中隊長 中尉 關戸義朗 特一八

第五中隊 中隊長 中尉 宮島一郎 特一三

第二大隊 大隊長 本部 少佐 長谷川多喜雄 特一三
 中尉 大尉 小辻隆三 五六期
 大尉 少佐 大尉 谷藤金治
 中尉 大尉 小野政雄 特一九
 中尉 大尉 飯屋隆二 五六期
 中隊長 中尉 石井育治 五五期

第一機關銃中隊 中隊長 中尉 石井育治 五五期
 大尉 少尉 長谷川望 五六期
 中尉 大尉 三宅政道 特一九
 中尉 大尉 鈴木清道 五五期

第四中隊 中隊長 中尉 守田恭助 五五期
 大尉 少尉 北山敏之 五五期
 中尉 大尉 稲本之悟 五五期

第三大隊 大隊長 本部 少佐 芦原忠三 特一三
 中尉 大尉 佐藤小治郎 特一三
 中尉 大尉 丸山定治 少二三

第二機關銃中隊 中隊長 中尉 加藤良雄 五五期
 大尉 中尉 上村陽一 五五期
 中尉 大尉 鶴田幸彦 五五期
 中尉 大尉 寺村恭治 五五期
 中尉 大尉 宮内正勝 五五期

第八中隊 中隊長 中尉 伊沢喜久雄 五五期
 大尉 中尉 前溝晋作 五五期
 中尉 大尉 佐藤幸重 五五期

第七中隊 中隊長 中尉 石山啓博 少二四
 大尉 中尉 光延幹夫 五七期
 中尉 大尉 藤本孝次 五七期
 中尉 大尉 山口新次 五七期

第五中隊 中隊長 中尉 山谷達男 少二四
 大尉 中尉 西村久夫 少二四
 中尉 大尉 沢登孝司 少二四

歩兵第三連隊

聯隊長 大佐 怡土軍 二八期
 本部副官 大尉 渡辺喜市 少二三
 中尉 堀江道徳 特二三
 中尉 高橋幸夫 特二九

第一大隊 大隊長 中尉 酒井一郎 准四七
 中尉 少佐 山形俊明 特一九
 中尉 大尉 田中武雄 特一九
 中尉 大尉 中田清秀 特一九
 中尉 大尉 石井茂信 特一九
 中尉 大尉 小倉義弘 特一九

第二中隊 中隊長 中尉 杉崎栄吉 少二三
 中尉 大尉 伊藤正彦 少二三
 中尉 大尉 小笠原義郎 少二三

第三中隊 中隊長 中尉 植馬信一 特一八
 中尉 大尉 森高秀雄 特一八
 中尉 大尉 本田幸兵衛 特一八

第一中隊 中隊長 中尉 杉崎栄吉 少二三
 中尉 大尉 岩片彦九郎 少二三
 中尉 大尉 杉山甫成 少二三
 中尉 大尉 黒田孝次 少二三
 中尉 大尉 岡野弘夫 少二三
 中尉 大尉 遠藤正夫 少二三
 中尉 大尉 田中武雄 少二三

第二大隊 大隊長 中尉 飯野幾彦 准四七
 中尉 大尉 中尾芳界 准四七
 中尉 大尉 伊藤敏彦 准四七
 中尉 大尉 日原弘二 准四七
 中尉 大尉 土肥義一 准四七
 中尉 大尉 高橋竜一 准四七
 中尉 大尉 高取重信 准四七
 中尉 大尉 磯村道重 准四七
 中尉 大尉 磯村道重 准四七
 中尉 大尉 友利正勉 准四七
 中尉 大尉 下地正俊 准四七

第三大隊 大隊長 中尉 山田尚道 少二四
 中尉 大尉 和田謙行 少二四
 中尉 大尉 川田博進 少二四
 中尉 大尉 山城興治 少二四
 中尉 大尉 長沼明進 少二四
 中尉 大尉 飯沼明進 少二四
 中尉 大尉 宮野芳界 少二四
 中尉 大尉 中尾芳界 少二四
 中尉 大尉 伊藤敏彦 少二四
 中尉 大尉 日原弘二 少二四
 中尉 大尉 土肥義一 少二四
 中尉 大尉 高橋竜一 少二四
 中尉 大尉 高取重信 少二四
 中尉 大尉 磯村道重 少二四
 中尉 大尉 磯村道重 少二四
 中尉 大尉 友利正勉 少二四
 中尉 大尉 下地正俊 少二四

第九中隊 中隊長 大尉 篠原一豊
 大尉 安岡邦文
 中尉 高田深
 " " 医中尉
第十中隊 中隊長 大尉 及川時雄
 中尉 近藤芳彦
 少尉 星野宗市
 " " 少尉
第十一中隊 中隊長 大尉 磯野義男
 中尉 市川瀨助
 少尉 磯野義男
 " " 中尉
第十二中隊 中隊長 大尉 池田幸三郎
 中尉 田中幸三郎
 少尉 井田宣五郎
 少尉 枳殼伸也
第十二中隊 中隊長 中尉 内田千代志
 少尉 夏目賢
 " " 少尉 川佐藤勇
 " " 大尉 本田清太郎
 " " 中尉 高貫栄次郎
 " " 少尉 高貫栄次郎
 " " 少尉 松本方武
 " " 少尉 高森享
第三機関銃中隊 中隊長 大尉 佐藤達明
 中尉 小保政美
 少尉 岡元基
 少尉 河原昌吉
 中尉 矢田竹造
 中尉 福井一
第一大隊 大隊長 大尉 山上誠之
 本部 中尉 新田裕
 小黒芳郎
 山川文康
 幸塚正吉
 菊本一
 高野陸
 伊藤栄郎
 医中尉 主中尉
 " " 中尉 大尉
 " " 少尉
第二中隊 中隊長 大尉 廣野孝平
 大尉 佐藤明
 中尉 福島政美
 少尉 小保政美
 少尉 岡元基
 中尉 河原昌吉
 少尉 矢田竹造
 中尉 福井一
第一大隊 大尉 廣野孝平
 中尉 佐藤明
 少尉 小保政美
 少尉 岡元基
 中尉 河原昌吉
 少尉 矢田竹造
 中尉 福井一

第九中隊 中隊長 大尉 篠原一豊
 大尉 安岡邦文
 中尉 高田深
 " " 医中尉
第十中隊 中隊長 大尉 及川時雄
 中尉 近藤芳彦
 少尉 星野宗市
 " " 少尉
第十一中隊 中隊長 大尉 磯野義男
 中尉 市川瀨助
 少尉 磯野義男
 " " 中尉
第十二中隊 中隊長 大尉 池田幸三郎
 中尉 田中幸三郎
 少尉 井田宣五郎
 少尉 枳殼伸也
第十二中隊 中隊長 中尉 内田千代志
 少尉 夏目賢
 " " 少尉 川佐藤勇
 " " 大尉 本田清太郎
 " " 中尉 高貫栄次郎
 " " 少尉 高貫栄次郎
 " " 少尉 松本方武
 " " 少尉 高森享
第三機関銃中隊 中隊長 大尉 佐藤達明
 中尉 小保政美
 少尉 岡元基
 少尉 河原昌吉
 中尉 矢田竹造
 中尉 福井一
第一大隊 大隊長 大尉 山上誠之
 本部 中尉 新田裕
 小黒芳郎
 山川文康
 幸塚正吉
 菊本一
 高野陸
 伊藤栄郎
 医中尉 主中尉
 " " 中尉 大尉
 " " 少尉
第二中隊 中隊長 大尉 廣野孝平
 大尉 佐藤明
 中尉 福島政美
 少尉 小保政美
 少尉 岡元基
 中尉 河原昌吉
 少尉 矢田竹造
 中尉 福井一
第一大隊 大隊長 大尉 廣野孝平
 中尉 佐藤明
 少尉 小保政美
 少尉 岡元基
 中尉 河原昌吉
 少尉 矢田竹造
 中尉 福井一

第九中隊 中隊長 大尉 篠原一豊
 大尉 安岡邦文
 中尉 高田深
 " " 医中尉
第十中隊 中隊長 大尉 及川時雄
 中尉 近藤芳彦
 少尉 星野宗市
 " " 少尉
第十一中隊 中隊長 大尉 磯野義男
 中尉 市川瀨助
 少尉 磯野義男
 " " 中尉
第十二中隊 中隊長 大尉 池田幸三郎
 中尉 田中幸三郎
 少尉 井田宣五郎
 少尉 枳殼伸也
第十二中隊 中隊長 中尉 内田千代志
 少尉 夏目賢
 " " 少尉 川佐藤勇
 " " 大尉 本田清太郎
 " " 中尉 高貫栄次郎
 " " 少尉 高貫栄次郎
 " " 少尉 松本方武
 " " 少尉 高森享
第三機関銃中隊 中隊長 大尉 佐藤達明
 中尉 小保政美
 少尉 岡元基
 少尉 河原昌吉
 中尉 矢田竹造
 中尉 福井一
第一大隊 大隊長 大尉 山上誠之
 本部 中尉 新田裕
 小黒芳郎
 山川文康
 幸塚正吉
 菊本一
 高野陸
 伊藤栄郎
 医中尉 主中尉
 " " 中尉 大尉
 " " 少尉
第二中隊 中隊長 大尉 廣野孝平
 大尉 佐藤明
 中尉 福島政美
 少尉 小保政美
 少尉 岡元基
 中尉 河原昌吉
 少尉 矢田竹造
 中尉 福井一
第一大隊 大隊長 大尉 廣野孝平
 中尉 佐藤明
 少尉 小保政美
 少尉 岡元基
 中尉 河原昌吉
 少尉 矢田竹造
 中尉 福井一

步兵砲大隊 大隊長 中尉 長谷川照敏
 中尉 鈴木正義
 中尉 阿部剛
 主中尉 猪野四郎
 医中尉 山極壽夫
第一步兵砲中隊 中隊長 中尉 山極壽夫
 少尉 小原早苗
 " " 中尉 磯山実
第二步兵砲中隊 中隊長 大尉 白井定信
 中尉 村上義信
 少尉 下河辺義信
通信中隊 中隊長 中尉 長島照雄
 少尉 山崎清海
步兵第三十連隊 大隊長 大尉 富沢国松
 本部副官 中尉 清水清治
 中尉 木村清治
 少尉 伝田鹿藏
 少尉 上之山勇次
 少尉 川上富藏
 少尉 秋森和久
 少尉 山本進
步兵第三十連隊 大隊長 大尉 富沢国松
 本部副官 中尉 清水清治
 中尉 木村清治
 少尉 伝田鹿藏
 少尉 上之山勇次
 少尉 川上富藏
 少尉 秋森和久
 少尉 山本進

第六中隊

中隊長 大尉 山谷誠一

少尉 橋口克己

五七期

第七中隊

中隊長 大尉 横井長太郎

少尉 直松喜久

特三〇

第八中隊

中隊長 大尉 佐藤正己

少尉 山口勝夫

少三四

第二機關銃中隊

中隊長 大尉 菅野博士

少尉 甘粕恒雄

五六期

第三大隊

大隊長 大尉 小宮善吉

少尉 萩野美助

少一八

第九中隊

中隊長 大尉 高橋久平

少尉 原正毅

特二〇

第十中隊

中隊長 大尉 杉山育三

少尉 丹羽米吉

少三三

第十一中隊

中隊長 大尉 櫻野裕史

少尉 大野裕史

特三〇

第十二中隊

中隊長 大尉 藤上達郎

少尉 小清水恒

特一九

第三機關銃中隊

中隊長 大尉 鈴木祐司

少尉 香取忠裕

特一八

步兵砲大隊

大隊長 少尉 津田正男

少尉 小坂橋完寿

准五〇

步兵砲第一中隊

中隊長 大尉 增田覚之

少尉 小林一弘

特一七

第九中隊

中隊長 大尉 大原一郎

少尉 小池徳夫

特二〇

步兵第三十六連隊

步兵砲第二中隊

中隊長 大尉 津田崇夫

少尉 佐藤清

特一九

通信隊

隊長 大尉 山田二郎

少尉 黒瀬光敏

五五期

聯隊長 本部副官

大尉 田村権一

少尉 竹林利孝

二七期

大尉 伊藤敏勝

中尉 大西義一

特一一

中尉 戸原甚太郎

少尉 高山信

少三三

中尉 大村藤市

少尉 斎藤敏胤

五七期

中尉 井上俊一

少尉 片山是

中尉 波多野義忠

中尉 増田照

第一大隊

大隊長 少佐 東寿満夫

中尉 小池徳夫

五一期

第一中隊

中隊長 大尉 回陽博行

少尉 島山賢司

五六期

第二中隊

中隊長 大尉 藤岡弘志

少尉 川崎覚二

少二四

第三中隊

中隊長 大尉 津司忠男

少尉 小林光造

特一八

第四中隊

中隊長 大尉 有馬藤吉

少尉 久保田仲一

特一八

第一機關銃中隊

中隊長 大尉 高重行

少尉 西沢益雄

五五期

中尉 大城發

少尉 舟橋拙三

五六期

第一中隊 中隊長	步兵砲大隊 大隊長	速射砲中隊 中隊長	第三機關銃中隊 中隊長	第十二中隊 中隊長	第八中隊 中隊長	第七中隊 中隊長	第六中隊 中隊長	第五中隊 中隊長	第二大隊 大隊長	長
少尉 大尉 中尉	主中尉 中尉 大尉 少尉	中尉 少尉	中尉 大尉 中尉	中尉 大尉 中尉	大尉 中尉 中尉	中尉 中尉 中尉	大尉 中尉 少尉	中尉 大尉 中尉	中尉 大尉 中尉	少尉 中尉 少尉
平沢 野尻 中野 友一	久保 木村 岸地 杉本	深谷 杏掛 谷重 義夫	河端 岡本 橋本 大野 橋本 大野 義夫	池上 小西 鈴木 山元	白石 後藤 上野 持田 上田 坂倉 古市 北信 浅井 木内 上村 鈴木 本田	坂倉 古市 北信 浅井 木内 上村 鈴木 本田	坂倉 古市 北信 浅井 木内 上村 鈴木 本田	中野 永野 杉森 大矢 前田 小高 森本 須永 岩橋	中野 永野 杉森 大矢 前田 小高 森本 須永 岩橋	島村 秀一 橋英 雄
				五六	特一九		少二四	特二二	少二三	准五〇

第一中隊 中隊長	聯隊長 本部	通信隊 中隊長	第二大隊 中隊長	第十中隊 中隊長	第十一中隊 中隊長	第九中隊 中隊長	第三大隊 大隊長 本部	第二大隊 中隊長	第二大隊 中隊長	第二大隊 中隊長
大尉 中尉	大尉 中尉	中尉 大尉	大尉 中尉 少尉	大尉 中尉 少尉	大尉 中尉 少尉	大尉 中尉 少尉	少佐 大尉 大尉	大尉 中尉	大尉 中尉	大尉 中尉
岩間 井橋 野口 長谷川	上田 保坂 藤堂 佐藤 木下 宮村 山本 馬場 齊藤 矢野 坂本	長田 山總 内田 洪沢 泉次	下山 岡田 加藤 牛山 市之瀬 西前 坂田 鈴木 佐藤 佐藤 青木 吉田	小幡 普神 高倉 山尾 宮内	市之瀬 西前 坂田 鈴木 佐藤 佐藤 青木 吉田	市之瀬 西前 坂田 鈴木 佐藤 佐藤 青木 吉田	柴田 松田 山口 奥村 清水 岡本 小林 江連	柴田 松田 山口 奥村 清水 岡本 小林 江連	柴田 松田 山口 奥村 清水 岡本 小林 江連	柴田 松田 山口 奥村 清水 岡本 小林 江連
	特二九 特一八 二期	五五期	特一八	特一五 少二四	特一八	特一九	五二期	少二三	特一九	特二〇

騎兵第二十八連隊

本部 中尉 高須 清 特一八

第四中隊 中隊長 藍谷 馨 五六期

第五中隊 中隊長 青野 修三 少二五

第六中隊 中隊長 高良 武 五六期

第三大隊 大隊長 井上 善市 少一八

本部 中尉 高須 清 特一八

第四中隊 中隊長 藍谷 馨 五六期

第五中隊 中隊長 青野 修三 少二五

第六中隊 中隊長 高良 武 五六期

第三大隊 大隊長 井上 善市 少一八

本部 中尉 高須 清 特一八

第七中隊 中隊長 山本 登 特一八

第八中隊 中隊長 志村 金次郎 五六期

第九中隊 中隊長 依知川 義隆 五六期

特設追擊砲 大隊長 石井 楠壽 特一九

第三中隊 中隊長 尾崎 茅德 少一九

第四中隊 中隊長 西条 末男 少二四

砲台長 中隊長 山賀 了 特一九

第七中隊 中隊長 山本 登 特一八

第八中隊 中隊長 志村 金次郎 五六期

第九中隊 中隊長 依知川 義隆 五六期

特設追擊砲 大隊長 石井 楠壽 特一九

第三中隊 中隊長 尾崎 茅德 少一九

第四中隊 中隊長 西条 末男 少二四

砲台長 中隊長 山賀 了 特一九

山砲兵第二十八連隊

聯隊長 大佐 梶 松次郎 二八期

本部副官 大尉 渡辺 敬二 特二一

中尉 戸 梶 正寿 特一九

中尉 荻 生日忠 特二一

中尉 小 浦 貞雄 特一九

中尉 井 石 孟司 特二八

中尉 野 崎 芳一 特二八

技大尉 上 村 善治 特二八

主大尉 小 野 節三 特二八

医大尉 久 我 正己 特二八

中尉 松 島 国彦 特二八

獸大尉 川 上 正志 特二八

小島 信忠 特二八

中尉 野 田 勘士 少二二

中尉 陶 山 國見 少二二

中尉 佐 藤 繁雄 少二二

中尉 山 崎 繁雄 少二二

中尉 岩 福 新治 少二二

中尉 前 沢 勝治 少二二

中尉 本 多 恒雄 少二二

中尉 三 里 虎雄 少二二

中隊長 長 谷 川 儀平 少二二

中隊長 岩 福 新治 少二二

中隊長 山 崎 繁雄 少二二

中隊長 佐 藤 繁雄 少二二

中隊長 陶 山 國見 少二二

中隊長 野 田 勘士 少二二

中隊長 岩 福 新治 少二二

中隊長 本 多 恒雄 少二二

中隊長 三 里 虎雄 少二二

中隊長 長 谷 川 儀平 少二二

第一大隊 大隊長 西本 勉一郎 四四期

本部 中尉 鈴木 正長 茂 五五期

中尉 林 本 正長 茂 五五期

中尉 少佐 西本 勉一郎 四四期

中尉 木 内 茂夫 五五期

中尉 松 川 正信 五五期

中尉 錦 織 忠男 五五期

中尉 佐 藤 忠男 五五期

中尉 芦 沢 勇人 五五期

中尉 日 沖 牧 太 五五期

中尉 福 田 国如 五五期

中尉 宮 竹 圭慈 五五期

中尉 佐 々 倉 重治 五五期

中尉 河 上 久雄 五五期

中尉 早 野 真隆 五五期

中尉 中 島 久雄 五五期

中尉 清 水 清 五五期

中尉 山 下 正弘 五五期

中尉 松 野 健一 五五期

中尉 河 村 恒 五五期

中尉 菊 池 恒 五五期

中尉 彦 坂 欽 五五期

中尉 鬼 塚 一 五五期

中尉 少佐 鬼塚 一 五五期

中尉 須 藤 三郎 五五期

中尉 廣 根 芳衛 五五期

中尉 浅 野 繁 五五期

中尉 江 川 喜雄 五五期

中尉 間 中 喜雄 五五期

中尉 斎 藤 健三 五五期

中尉 竹 村 貞市 五五期

中尉 山 本 登 五五期

中尉 真 鍋 正一 五五期

中尉 志 村 金次郎 五五期

中尉 依 知 川 義隆 五五期

中尉 塚 本 千 年 五五期

中尉 四 宮 太 郎 五五期

中尉 出 村 一 男 五五期

中尉 石 井 楠 壽 五五期

少佐 久 保 野 武 五五期

少佐 尾 崎 茅 德 五五期

中尉 西 条 末 男 五五期

中尉 杉 本 武 敏 五五期

中尉 山 賀 了 五五期

工兵第二十八連隊

聯隊長 大佐 外賀 猪一
 本部副官 大尉 桜井 三郎
 大尉 中島 富雄
 少佐 大尉 井上 和太郎
 中尉 藤井 隆
 " 井上 和太郎
 " 藤井 隆
 " 岡田 好雄
 主大尉 辻川 乾平
 医大尉 石川 洋平
 " 島田 重郎
 " 吉田 明博
 獸大尉 尾後 貫博
 大尉 尾崎 龜吉
 中尉 佐藤 豊吉
 " 日沼 實
 " 伊藤 甚吉
 " 堀之内 貞久
 少尉 " 眞
 " 藤井 信夫
 中尉 加藤 英夫
 大尉 藤井 信夫
 少尉 前田 幸三
 " 小泉 幸三
 " 石田 信夫
 " 川越 一之

二八期
 五六期
 五一九
 特一八
 五五期
 少二四
 五六期
 五七期
 少三五

第三中隊

中隊長 大尉 尾本 武雄
 中尉 清崎 義春
 " 實藤 孝一
 " 朝比奈 三郎
 " 高梨 武雄

特一九

輜重兵第二十八連隊

聯隊長 少佐 宮川 正
 本部副官 中尉 山崎 平三郎
 中尉 岡村 敬次郎
 大尉 栗原 倣作
 " 秋永 広一
 大尉 山田 金之助
 中尉 宇野 常彦
 " 岡部 俊治
 " 吉田 尚久
 少尉 志村 義治
 主大尉 志村 義治
 医大尉 谷山 雅哉
 大尉 雪下 新正
 大尉 大森 弘
 大尉 松尾 延夫
 中尉 岩本 徳平
 主中尉 渡辺 寛二郎
 医中尉 江波 戸良
 大尉 内山 輝次

五二期
 五六期
 特
 少二四

第二中隊

中隊長 大尉 遠藤 陽三
 " 林 助作
 " 東 車 憲
 獸中尉 柏谷 光雄
 " 吉永 光雄

少二四

第三中隊

中隊長 大尉 江口 一定
 中尉 小倉 敏男
 " 漆間 洋造
 " 津田 兵一
 " 久保 又治
 " 廣井 修

少二四

第二大隊

大隊長 少佐 香川 寿儀
 大尉 山本 正太郎
 中尉 三木 茂久
 主中尉 加地 和夫
 医大尉 田嶽 修治

少二六
 五七期

第四中隊

中隊長 大尉 江本 広
 中尉 高梨 哲
 少尉 宮本 秀康

五五期

第五中隊

中隊長 大尉 米山 信介
 中尉 井戸 実
 " 沢 弘
 少尉 中村 太郎

少二三

第六中隊

中隊長 大尉 安藤 孝
 中尉 富塚 義郎
 " 小宮 健二郎
 " 阿戸 豊三郎

五五期

第二十八師団通信隊

隊長 少佐 国武 達雄
 大尉 八木 市蔵
 中尉 吉津 東三
 " 山瀬 稔
 " 赤沢 良行
 " 山田 良行
 " 鍵谷 健三
 医大尉 金子 純雄

准五〇
 特二〇

独立速射砲第二十五中隊

中隊長 大尉 柿瀬 慶一郎
 中尉 関 恵造
 少尉 長岡 朝一郎

独立速射砲第二十六中隊

中隊長 中尉 桜田 源吾

中尉 財部 正 賀
" " 城岡 善 治
" " 吉岡 善 治

第二十八師團制毒訓練所

隊長 少佐 那須 忠三
中尉 河田 桂
" 鶴丸 壽一
少 二八
特 二八

第二十八師團兵器修理所

隊長 大尉 藤本 武雄
特 二七

第二十八師團病馬収療所

隊長 獸大尉 保坂 斯道
" 中尉 齊藤 丹次
" " 近藤 達
" " 村岡 五郎
" " 市川 宗徳
獸務少尉 東海林 金治

第二十八師團防疫給水部

隊長 医少佐 大科 達夫
医大尉 西川 伊佐美
医中尉 柴田 義一
" 小島 喜一郎
" 原 敬一郎
主中尉 片桐 義人

衛大尉 長瀬 富次
" " 谷藤 三郎
" " 成田 精二
" " 米田 一平
" " 衛大尉 長瀬 富次

第二十八師團第二野戰病院

医大尉 三好 祝二
" " 山崎 清春
" " 加藤 治平
" " 大山 隆司
" " 小杉 宗平
" " 露木 三之助
" " 井上一 正
" " 秋山 正雄
" " 影山 正明
" " 白髮 絲一
" " 合原 義泰
" " 早川 義享
" " 坂本 彌四郎
" " 大郷 楯之助
" " 小泉 頼之助
" " 八戸野 富士雄
" " 關谷 英雄
" " 吉田 美彦
" " 尾形 重直

第二十八師團第三野戰病院

医大尉 横井 忠男
主中尉 楊井 秋亮
" " 武内 博夫
" " 德永 勝三
" " 松井 信
" " 山本 都夫
" " 北原 哲夫
" " 石崎 芳郎
" " 穴崎 光美
" " 井上 隆利
" " 中山 二郎
" " 古屋 華春
" " 田原 萬蔵
" " 佐々木 吉五郎
" " 鷹取 毅
" " 三須 美知
" " 新島 迪夫
" " 森脇 啓忠
" " 駒瀬 元治

第二十八師團第四野戰病院

医少佐 辻 義春
主中尉 佐久間 知三
" " 佐藤 弘之
" " 鈴木 義雄
" " 鈴木 義雄

独立混成第五十九旅団

司令部
長 少将 多賀 哲四郎
" " 中佐 藤 伊寿郎
" " 少佐 三沢 三雄
" " 大尉 小梨 貞三
" " 大尉 塚本 貞三
" " 大尉 川村 辰雄
" " 大尉 石川 秋保
副官 少佐 藤 伊寿郎
" " 大尉 小梨 貞三
" " 大尉 川村 辰雄
" " 大尉 石川 秋保
軍医 大尉 川村 辰雄
" " 大尉 石川 秋保
軍計 大尉 石川 秋保
" " 大尉 石川 秋保
二六期
二七期

主計

大尉

飯島 喜太郎

米良 稔

岩佐 原四郎

石ヶ谷 錦吉

久保田 萬藏

独歩第三九三大隊

長

少佐

福永 喜久磨

副官

少尉

鍋島 正行

軍医

大尉

森村 文治

主計

少尉

池田 満穂

第一中隊長

中尉

東野 豊

第二中隊長

少尉

安部 英雄

付

中尉

木下 英助

第三中隊長

少尉

鶴留 正則

機関銃中隊長

中尉

大石 正信

見士

少尉

小笠原 正信

大隊砲中隊長

中尉

山内 正昌

菅谷 伝助

少尉

伝助

長

大尉

武田 豊

独歩第三九四大隊

長

大尉

武田 豊

独歩第三九五大隊

長

大尉

脇本 幸男

独歩第三九六大隊

副官

大尉

竹内 隆

軍医

中尉

酒井 隆

主計

大尉

脇坂 隆

第一中隊長

中尉

安本 隆

第二中隊長

少尉

酒多 隆

第三中隊長

中尉

波辺 隆

機関銃中隊長

大尉

伊藤 隆

連射砲

中尉

岸原 隆

旅団砲兵隊

大尉

遠藤 隆

工兵隊

少佐

美馬 敬一

通信隊

大尉

清谷 隆

独立混成第六十旅団

長

少将

安藤 忠郎

副官

大尉

富宿 隆

高級部員

中尉

甲野 末吉

兵器

少佐

松崎 公

少尉

須永 公

二期
九期

通信 暗号 輜重 主計 軍医 獣医 薬剤

少尉 中尉 大尉 中尉 大尉 中尉 少尉

星野 幸雄 木村 三三夫 柴田 源次郎 松尾 源次郎 清海 晋 西堀 東治 水島 斌 佐々木 博一 高島 慶四郎

独歩第三九七大隊

長

少佐

田島 勇三郎

副官

大尉

尾上 忠一

軍医

中尉

矢持 誠一

獣医

少尉

堀井 五十五郎

主計

大尉

川村 秀雄

一中隊長

少尉

柴田 美澄

二小

三宅 秀一

三小

横内 重信

二中

石津 宅美

一少

水出 善助

二少

松永 熊夫

三小

阿久津 宏

一中

大友 正一

一小

野正 明和

二小

前田 文治

三少

平本 和也

MG中

大尉

宗 貫一

中尉

少尉

山崎 義也

少尉

中尉

小林 正平

中尉

少尉

山崎 主一

少尉

中尉

川頭 太郎

少尉

中尉

黒沢 金一

独歩第三九八大隊

長

少佐

黒田 正孝

一中

中尉

岩田 文彦

二中

中尉

堀之内 高彦

MG中

少尉

古賀 義人

歩兵砲中

中尉

川原 繁治

独歩第三九九大隊

長

大尉

村本 松可

一中

中尉

のちに 新井 佑

二中

中尉

平井 一二四

MG中

少尉

巢瀬 武志

歩兵砲中

中尉

倉田 切

独歩第四百大隊

長

大尉

川村 尾張

一 中	外山 勇吉
二 中	安藤 大一郎
三 中	花田 忠夫
M G 中	佐多 巧
步兵砲中	大森 巧
旅団砲兵隊	
長	大尉 福島 郷一
一 中	三浦 速人
二 中	森 慶季
三 中	音谷 千蔵
段列中	奥田 蔵
旅団工兵隊	
長	大尉 黒木 圭三
旅団通信隊	
長	大尉 牛尾 慎吾
野重第一連隊第一大隊	
長	少佐 高矢 三郎
副官	中尉 片岡 明
一 中	中尉 三上 明
二 中	中尉 杉江 介
三 中	大尉 川戸 康介
その他	
独逸第五大隊	少佐 西本 哲郎
戰車二七連隊第三中隊	大尉 渡辺 晃米
特設第四十七機關砲隊	大尉 瀬見 修三
特設第二〇九中	中尉 当間 林光

二一〇	第五〇五特設警備工兵隊	中尉 宮城 清昌
"	海上挺進第四戰隊	中尉 下地 惠二
"	海上挺進基地第四大隊	少佐 金子 重樹
"	第三十六大隊	大尉 西江 重樹
"	第二〇五飛行場大隊	少佐 藤倉 長太郎
"	特設水上勤務第一〇一中隊	中尉 吉岡 軍一
"	獨立機關銃第十八大隊	中尉 吉岡 軍一
"	野戰作井第八中隊	少佐 二木 寛行
"	九中隊	少佐 齊藤 甚蔵
"	十六中隊	大尉 高橋 信雄
"	要塞建築勤務第八中隊	大尉 藤野 清三郎
"	宮古島陸軍病院	少佐 岸川 善二
"	第三十二野戰貨物廠先島支廠	少佐 榎松 輝之助
"	船輪送司令部宮古出張所(?)	大尉 木村 陽之助
"	宮古島憲兵分隊	少佐 渡辺 吉久
"	獨立第四警戒隊	大尉 武田 茂一
"	電信第三六連隊宮古隊	
"	第三十二野戰築城隊第四中隊	
"	船輪工兵第二十三連隊第一中隊	
"	北部船輪宮古出張所	
"	第七船輪移動修理班	
"	第五航空修理廠宮古班	
"	第十野戰風象隊	
"	第二十六對空無線隊	
"	第十六航空通信宮古隊	
"	中央航空路第五保安隊宮古隊	
"	第五野戰航空修理廠第一支廠第一獨立整備隊	

宮古島關係海軍將校名

(昭和二十年八月十五日現在)

大佐	村尾 重二
技少佐	吉丸 藤吉
技大尉	岩井 久男
技中尉	村上 魁
技中尉	高橋 省次
技少佐	齊藤 明
医大尉	曾我 立己
医中尉	大亀 紀雄
主大尉	世良 昌秘
主中尉	三辺 佑介
主大尉	八木 正三
主中尉	磯部 宗助
大尉	伊里 宗助
中尉	則包 国光
"	福永 謙一
"	松田 清
"	瀬能 卓也
"	大石 一男
"	駒井 義信
"	辻 忠男
"	海堀 洋平
"	新田 正雄
"	漢 要吉
"	富田 梅太郎
"	桑畑 松太郎

中尉	中村 虎喜
"	谷脇 力務
少尉	高野 品男
"	江門 堅治
"	谷口 五郎
"	杉野 史郎
"	武部 良純
"	菅谷 興夫
"	尾崎 正三
"	荒田 逸郎
"	藤岡 正勝
"	植木 正彦
"	林 敏夫
"	川島 喜一
"	川合 堯一
"	津川 治郎
"	日永田 政俊
"	石坂 信雄
"	伊藤 忠夫
"	木下 繁樹
"	中村 永年
"	赤嶺 春男
"	山田 兼次郎
"	百崎 忠夫
"	唐津 正男
"	新池 武夫
"	江口 善太郎

兵曹長

雨田俊男
中島清美
福田宗晴
越崎光治
松隈国定
小笠原義
長野安一
和田善之助
平川勇三
入谷勝三
本田正次
福田正次
森坂寛
小坂慶次
香川熊大

冥友録

(官職は先島群島作戦当時・四十九年十二月現在)

第二十八師団長 中将 楠瀬 鎮一 39年9月20日歿
 独立混成第五十九旅団長 少将 多智哲四郎 30年12月27日
 " 第六十旅団長 少将 安藤忠一郎 29年1月11日
 第二十八師団参謀長 少将 福地 春男 28年12月9日
 " 中佐 一瀬 寿 46年4月21日
 第二十八師団参謀 中佐 杉本 和朗 46年6月21日
 步兵第三聯隊長 大佐 怡土 軍 42年7月20日
 " 第三十聯隊長 大佐 富沢 国松 36年12月19日
 工兵第二十八聯隊長 大佐 外賀 篤一 30年7月5日
 山砲兵第二十八連隊長 大佐 梶 松次郎 29年3月6日
 騎兵第二十八連隊長 大佐 上田 敏 46年6月
 独立混成第五十九旅団高級部員
 第二十八師団司令部付 中佐 蔵 伊寿郎 40年
 第七船舶輸送司令部 少佐 冨木 孝司 39年1月22日
 第二十八師団通信隊長 少佐 入田 慶一 35年秋
 少佐 國武 達雄 46年

宮古島作戦関係年表 (自昭和十八年 至 二十一年二月)

昭和十八年
 十九年二月二十二日 海軍飛行場設定工事始まる
 第三十二軍創設
 五月 西部軍司令官下村定中将初度巡視
 五月二十日 先島守備隊長に宮崎武之少将
 五月 陸軍中・西飛行場工事始まる
 六月二十九日 陸軍輸送船富山丸遭難
 六月三十日 第二十八師団、第三十二軍編入発令、宮古島配置決る
 七月六日 第二十八師団福地参謀長ら到着
 七月七・八日 大本營参謀長勇少将来島
 七月二十日 第二十八師団長楠瀬中将到着
 七月二十五日 歩兵第三十連隊主力、軍艦で宮古島到着
 八月 非戦斗員の島外疎開始まる
 八月二十二日 独立混成第四十五旅団司令部、石垣島に移動
 九月四日 第三十二軍長参謀長一行、飛行場工事視察
 九月 信号弾、敵潜水艦の出没頻り
 九月中旬 第三十二軍長参謀長一行、飛行場工事視察
 九月十七日 独立混成第五十九、同六十旅団主力到着
 十月五日 第三十二軍半島軍司令官一行初度巡視
 十月十日 陸軍中・西飛行場完成
 十月十三日 初空襲、輸送船広田丸沈没
 十月十六日 台湾沖航空戦
 十二月 侍従武官坪島文雄中将来島
 十二月二十二・三日 敵大型機の偵察、海上補給路妨害頻り
 第三十二軍長参謀長ら来島、宮古島防衛のための兵棋演習
 新年初空襲
 B29偵察飛行に初見
 楠瀬中将、第三十四軍司令官へ転出発

昭和二十年一月十六日 新集団長納見敏郎中将台湾より着任
 一月二十一日 艦載機延五十六機来襲、船舶陸上施設に損害
 二月一日 参謀長更迭、福地少将南支へ、後任一瀬大佐発令
 二月十五日 敵機動部隊接近、集団司令部野原越に移動
 三月一日 艦載機延六十機来襲、大建・豊坂丸撃沈され最終船となる。
 三月二十五日 米軍慶良間島上陸、連続空襲始まる
 三月三十日 大空襲、女学校・無線受信所・測候所などに被害
 四月一日 米軍沖繩上陸
 四月二十六日 米軍、宮古島攻略作戦中止
 五月四日 始めにして終りの艦砲射撃
 六月二日 乙戦艦下令、敵空挺部隊降下の情報しきり
 六月 独立混成第五十九旅団主力、伊良部島から平良町へ移動
 七月 沖繩戦終る
 八月十五日 空襲開始、取り残された島の感。軍民あけて食糧自給体制強化
 八月二十三日 終戦の詔勅
 九月七日 納見中将、沖繩へ向かい停戦協定調印
 九月二十六日 沖繩で降伏文書調印式
 十月六日 飛行場、測候所へ復員連絡所開設
 十月二十日 武装解除完了
 十一月二十五日 復員第一号海防艦一九二号出港
 十二月一日 米船コーヘン出港、大量復員始まる
 十二月十三日 納見中将、B級戦犯指定
 十二月 納見中将自決
 米軍政施行
 復員完了

資料御協力者芳名 (敬称略)

- 一、防衛庁防衛研究所戦史室 伊藤常男
- 一、厚生省援護局調査課
- 一、独立混成第四十五旅団長 宮崎武之
- 一、第三十二軍高級参謀 八原博通
- 一、第二十八師団参謀 陸路富士雄
- 一、" 脇田 豊
- 一、" 軍医部長 脇田 豊
- 一、" 高級副官 浜 久
- 一、" 経理部 当麻靖彦
- 一、" 軍医部 山田 豊
- 一、" 司令部付 外村奥次
- 一、" 豊島勝美
- 一、独立混成第六十旅団高級部員 甲木誉一
- 一、独立歩兵第三九七大隊長 田島勇三郎
- 一、" 副官 尾上忠一
- 一、" 輜重兵第二十八聯隊長 宮川 正
- 一、独立歩兵第三九三大隊長 福永 備
- 一、" 第三九四大隊長 武田 登
- 一、宮古島海軍警備隊副官 新田正雄
- 一、宮古南警備隊隊長 井手二郎

第二十八師団参謀長 (故) 一瀬 寿

" 参謀 " 杉本和朗

歩兵第三聯隊長 " 怡土 軍

騎兵第二十八聯隊長 " 上田 巖

第二十八師団長 楠淵 鐘一夫人 知恵

" 納見 敏郎夫人 おはる

第二十八師団参謀長 福地 春男夫人 アヤ

独立混成第五十九旅団長 多賀哲四郎夫人 鶴代

" 第六十旅団長 安藤忠一郎夫人 コト

歩兵第三十聯隊長 富沢 国松夫人 米子

参 考 文 献

- 沖縄方面陸軍作戦 伊藤常男
- 沖縄決戦 八原博通
- 沖縄かくて潰滅す 神 直道
- 太平洋の戦い 米国防総省
- 世界の艦船 伊藤正徳
- 帝国陸軍の最後
- 沖縄新報 (自昭和19年12月至20年3月)
- 宮古朝日新聞 (自昭和19年10月至20年2月)

あとがき

本書は当初一九七二年刊行予定だったが、復帰後の経済変動に伴う出版費用の高騰、印刷所側との契約の更新などの事情で予定期日を大巾に遅れ、関係者各位に御迷惑をお掛けしたことを深くお詫び申上げる。本書の編さんに当っては筆者が直接関係者にお会い(一九七一年秋と一九七四年二月)して御教示を受けると共に文書による御協力を得た。未だ不十分な点が少なくないが、一応の努力はしたつもりである。この点御理解頂けば幸甚に存する。

なお本書の出版費助について多大なる御協力御支援を頂いた左記各位に対し、深甚なる感謝の意を表明する。(敬称略)

- 第二十八師団司令部及び歩三関係 堀江道徳
- 輜重兵第二十八聯隊関係 西本 浅男
- 豊水会(第二十八師防疫給水部) 豊島勝美
- 山本 正太郎
- 大沢金蔵
- 熊本鉄雄
- 大橋 弘
- 霧生印刷(代表取締役) 霧生 藤吉郎
- (第二十八師団通信隊)

著者略歴

- 一、大正九年生
- 一、戦前戦後を通じ、新聞、文筆活動に携わる
- 一、昭和十九年十二月 宮古朝日新聞社長代理
- 一、著書
 - 宮古島戦記 一九六六年三月
 - 石垣島防衛戦史 一九七〇年七月
- 一、現住所 那覇市富里島堀四―二三

一九七五年六月 初版 定価二、〇〇円

著者 瀬名波 栄

発行所 先島戦記刊行会

〒 那覇市松山二―三―六

ベントビル二階(春秋社内)

電話(元六) 六八―八―四五番

印刷・製本 霧生印刷株式会社

〒 神奈川県相模原市清新八―一―五

電話(四七) 五二―三―三四番

